
世界を渡る召喚士

学生ひきこもり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界を渡る召喚士

【Nコード】

N3096Z

【作者名】

学生ひき二ート

【あらすじ】

世界を渡る召喚士が物語る。世界の「変化」を求めて。

・・・この小説は主人公視点でお送りしています。

新しい物語

「んで、君が今回応募した理由を聞きましょうか？」

「まあ、これでも結構色んなところに行ったことがあるので、そろそろ別のところに行ってもいい機会かなーと思って」

「なるほどね。うん採用。君の適正に合いそうなところ送るからそこら入って」
「ども」

俺は目の前にいる奴にそう言われて、そいつの後ろにある扉の中に入ってしまった。

扉の中に入り、外に出ると、そこは何も無い平原だった。

後ろを振り向くと、そこには同じ風景が広がっている。扉なんてこの風景に不釣り合いなものはない。

成功だ。

話に聞くとところによると、かなり確率は低いがたまに失敗することもあるらしいので、一安心だ。

俺は、取り敢えず歩き始めた。

さっきの面接は、……正式名称は知らないが、簡単に言えば、「世界を渡るための面接」だ。

世界を渡るといふのは、別に大げさに言っているわけではなく、今

いる世界から別の世界に行くことだ。

各世界には、世界を維持する「均衡」という概念の他に世界を変える「変化」という概念を必要としている。

これはどの世界にでもいる神信深い者からすれば、傲慢と捉えられるかもしれないが、世界というものは人が動かしている。

つまり、この「変化」というものは人によって作られる。

それは、その世界の住人がその世界を変えるのではなく、その世界の常識や定義といったものを根本から覆すような者によって引き起こされるものだ。

俺は俺たちのようなやつらを「渡り人」と呼んでいる。

渡り人の仕事は至極簡単で、自由に行った先の世界で過ごすことだ。それだけで、世界に大きな変化を生む。

変化はやがて常識や定義となって、世界に浸透し、世界が腐敗しないように働きかけるのだ。

というわけで、俺は新しい世界へと、たった今降り立ったのだ。

ファンタジーな頭の持ち主には羨ましがれるかもしれないが、その世界で生きていくのに必要なものは自分で調達しなければならなし、知識もなく、人脈もなく、雨風をしのぐ家もないのだから、割りりと来た当初は苦勞する。

俺が担当するような世界は、大抵言語でコミュニケーションを取る文化があるところなので、そういうところでは実は苦勞が少ない。なぜなら、俺には「共通語力」というものがあるので、俺が何を喋ろうと相手にこちらの言葉の意味を伝えることができるからだ。

よって、当面の目的は、「拠点づくり」と「生活力の確保」である。

「召喚せしは、《タンサクソウサ》」

俺がそう唱えると、目の前の風景に歪みが生じ、その中からウニという生物のように種類豊かな望遠鏡をハリの代わりに生やしたものが現れる。

「応えしは、我、《タンサクソウサ》」

『それ』はそう応えて、俺の前に浮かび続ける。

「この付近に人がいそうなところを探してくれ」
「了解した」

《タンサクソウサ》はそのまま上空に浮かび上がり、しばらくゆっくりと宙で回転を続け、その後少しして回転を止めた。

「ここより西方に、主が足で三半刻の場所に人の群れを確認した」
「わかった。ご苦労さん。戻っていいぞ」
「了解した」

そう言って、そのまま《タンサクソウサ》は霧のように消えていった。

俺は言われた通りに西に足を進めた。

さっきのは、俺が持つ唯一の能力である「召喚術」。
まあ詳しい説明は、追々するとして。
俺が渡り人として、やってけるのも、この能力があるからだとも言える。

この物語は、俺が勝手にこの世界で過ごしていく、なんの変哲もない、他愛のない日記のようなものだ。
だから、暇なやつが暇な時に適当に読むことを薦める。

さて、新たな俺の物語を始めよう。

門番

三時間ほど歩いて俺が辿り着いたのは、程々の高さの外壁に覆われた港町であった。

淡い砂色の外壁は、海の青と潮風と陽の光の強さと相性がよく見えた。

俺は港町の門に近づく。

門に近づくに連れて、行き交う人の波が目立ってくる。

俺は港町に入るために、門番を探した。

門番をすぐに見つけた俺は、軽装の鎧を見に纏ったその門番に話しかけた。

「ども」

「ん？ 何かようか？」

「この町に入りたいんだけど、いいか？」

「んん？ 変なことを聞くやつだな。入りたければお前のその足で入れればいいだろ？」

不思議そうに門番は首を傾げる。

「ああ、そうなのか。悪いね。てっきり許可がいるのかと思って」

俺がそう言つと門番は軽く笑みを見せた。

「ははは！ 変なことを言つやつだな。どっかのお国の城下町じゃないんだ。そんなことせんよ」

「そうなのか？ 密輸とかするやつだっているだろう？」

「そんなのは勝手にやらせておくよ。第一、後ろ暗いものを運んでいけば、この門にある『解析』の魔法が反応するだろうからな」

ふむ、そんなものがこの世界にはあるのか。

魔法がある世界は2回行ったことがあるけど、常時発動している魔法を見たのは初めてだな。

門番は俺を見て、さらに言葉を続ける。

「むしろお前みたいに、俺に話しかけるようなやつのほうが、怪しいくらいだよ」

「ああ、それは済まない。まあ悪さはしないから安心してよ」

「はは、どうせどこかの田舎から出てきたのだろ？俺も暇だったからな。簡単にでいいならこの町のことを教えてやろうか？」

「それは助かるな。是非頼む」

そうして俺は、この世界で初めて会話した門番の男からこの港町のことを教えてもらった。

町の名前は「ゼー」

意味は、町のシンボルにもなっている渡り鳥の鳴き声からとったらしい。

渡り人の俺としては、縁起のいい話だ。

この町の特徴としては、予想通り海産物の輸出が大きな産業となっている。

海産物は「水」と「風」の合成属性である「氷」の魔法がかけられた出荷箱に収められて各地に輸出されている。

町の建物の構成としては、

「町役場」「商館」「海師場」「宿泊施設」「各種ギルド」などが俺が気にすべきものとなる。

「海師場」というのは、俺が一番最初にいた世界の漁業組合とほとんど同じものだ。

「各種ギルド」は、

「戦士ギルド」……モンスター退治などの荒事専門。

「探掘者ギルド」……薬草採取や鉱石探掘専門。

「僧侶ギルド」……この世界の神を信仰し、人々の回復専門。

「魔法ギルド」……魔法研究専門。

「盗賊ギルド」……人に頼めないようなこと専門。

ギルドはこの5つがこの街にはあり、城下町のような大きなところに行くと、さらに他の専門ギルドがあるらしい。

「盗賊ギルド」は禁止している町もあるため、他のギルドに関しては大抵の町と呼べる大きさのところにはあるらしい。

俺は簡単にこれらのことを門番から聞いた後、町に入り、まずは手持ちの異世界のことを換金してから、各ギルドを回ることにした。

戦士ギルド

質屋で所持品とこの世界の通貨を交換した俺は、戦士ギルドへと足を運んでいた。

ゼーの町の戦士ギルドは、堅牢な石壁で建てられていて、デカデカと木製の看板を入り口の上に掲げていた。

入り口の脇の石柱には、「腕に自慢があるなら戦士ギルドへ！！」新ギルドメンバー募集中！！」と豪快に書かれたポスターが貼つてある。

俺はそのポスターの印象で、このギルドがどういうやつらがいるのか予想しながら、戦士ギルドに入っていた。

「んあ？ 依頼ですかい？」

入ってすぐ目の前にある受付にいる以下にも脱力している男が話しかけてきた。

無精髭に、寝ぼけた目の中肉中背の男で、髪と服装だけは、少し乱れているぐらいでまだマシといった風貌だ。

「いや、このギルドがどういうものか聞きに来ただけだけど」

「んだよ。冷やかしかよ」

男は依頼ではないと知って、面倒くさそうな口調になる。

「んで説明を聞きたいんだけど」

「あーん？ 入団しに来たんじゃないなら帰ってくれ。こちとら色々忙しいんだよ」

どう見ても忙しそうには見えない。

こんな接客能力が無いやつが受付で、このギルドが機能しているのか疑いたくなった。

「ちょっとガルさん。どうせ暇してるんだから、そのぐらいしてあげなさいよ」

後ろから聞こえてきた声の方を向くと、入り口ホールのテーブルに腰をかけている一人の女がいた。

赤めの茶髪に、ハッキリと開かれた目、愛嬌のある表情でこちらを見ている。

「うつせえなエイル。じゃあお前が説明してやれよ」

「あなたの仕事でしょそれは」

「ほら、お前。そこに座ってるやつから説明を聞いとけ。入団する気になったら俺のところに来い」

そう言っただけで、ガルと呼ばれた男はダルそうに机に伏せた。

俺は言われたままにテーブルに腰掛けて、いる女のところへ足を運んだ。

「悪いわね。ああいう人だけど、あれでもそれなりに腕の立つ人なのよ」

そう言っただけで、軽く笑みを浮かべながら、女は俺に正面に座るように手で促した。

「そんな風には見えないけど、人は見かけによらずってやつか？」

「ふふ、まあそんなところよ」

俺はテーブルの席に腰をかけた。

「改めまして、私はエイル。このギルドの5番隊の隊長をやってるわ」

「これは丁寧に。俺は……」

さて、なんて名乗ろうか？

……まあ、別に本名でもいいか。こういう小さいところでも世界に影響を与えるのが俺達の仕事だしな。

「ケンイチだ。よろしく」

「珍しい名前ね。どこの出身？」

「ここから西にかなり行ったところにある小さな村さ」

こういう場合、当たり障りのない適当なことを言っておくの常套手段である。

いきなり、異世界からだと言っても、変人扱いされて動きづらくなるかもしれないしな。

「へえ、そうなの。まあ戦士ギルドは出身地に関係なく、とにかく腕に自信がある人なら大歓迎だから大丈夫よ」

「それは助かるね」

あれこれ条件出されても困るしな。

「それで、今日は説明だけでいいの？」

「ああ、しばらくはこの町を拠点に活動しようと考えているから、どのギルドに所属しようか決めているところだ」

「なるほどね」

納得がいったようにエイルはうなずく。

「まあ、説明と言っても、あれこれ細かいことはあまり無いから安心して」

「わかった」

そのぐらいが丁度いいと思う。

「取り敢えず、このギルドの主な活動は、簡単に言えば『戦闘が必要な依頼を請け負い、解決すること』よ」

「まあなんとなく想像できるよ」

「ふふ、そうね。仕事内容の多くは、モンスター討伐になるわね。あとは、護衛の任務も結構あるわ」

「なるほど。わかりやすい」

「でもわかりやすい分、荒事が多いから、失敗は許されないし、怪我が致命的になることもあるから注意してね」

「ああ、わかった」

「まあ詳しい依頼の受け方とかは、入団してから説明を受けるから、もし入団したら聞いてね」

「了解」

エイルの説明は回りくどくなく、わかりやすい。

「あと、入団する際は『入団試験』があるから、受ける気があったら、受付で手続きして」

「入団試験って何をやるんだ？」

「それは担当になったギルドメンバーが決めるから、これだ！っていうのは無いわね。気分で内容を変えることなんてよくあることよ、なるほど」

「必要なのは、腕っぷしと臨機応変に動けるかだから、その辺を意

識して受ければ大丈夫よ」

「……それは教えていいのか？」

「大丈夫よ。意識しても出来ない人なんて山ほどいるから、この程度の情報は問題ないわ」

「納得した」

なるほど。

大体このギルドが何をやっているかはわかったな。

「ありがとう。大方わかったよ」

「そう。なら良かったわ。あなたが実力のある人だったら、この戦士ギルド『ドーデン』はあなたをいつでも歓迎するわ」

「ああ、情報ありがとう。それじゃあ」

俺は机に銀棒（この世界の通貨は棒状のものである）を一本置いて、
出口に足を運んだ。

「あら、別に良かったのに」

そう言いつつも、ニッコリとした笑みを浮かべているエイルを少し見て俺は戦士ギルドを後にした。

次は採掘者ギルドに足を運ぼう。

採掘者ギルド

採掘者ギルドは以外に早く見つかった。
というより、戦士ギルドから目視できる位置にあった。

採掘者ギルドは、重厚感ある木造の建物で、その建物にそぐわない煌びやかな看板が掲げられている。

安物の鉱石ならいいが、高価なものだったら盗まれるよな。絶対。
案外知らないうちに一個ぐらい減っているかもしれない。

俺は、入り口の横に貼ってあるポスターに目を配る。

「根気のある人随時募集中。私たちと一緒に夢を追いかけてませんか？」

……………夢を掴みましようぐらいは書けなかったのかと少し思いながらも、俺は採掘者ギルドに入ってしまった。

「ようこそ採掘者ギルド『ミレラリオ』へ！」

「あ、ども」

開口一番元気の良い挨拶を受付の女がしてきた。

ついつい先ほどの戦士ギルドとのギャップに尻込みしてしまった。

「本日はどのような御用ですか？」

「ああ、このギルドに入るか決めかねているから、その説明を聞きたいんだが……………」

「はい。畏まりました」

ふむ。このギルドは（受付の）感じが良くていいな。

「では、ご説明しますね」

「よろしく」

「このギルドでは主に、採集・採掘の依頼を請け負って、それを解決いたします」

「例えば、どんなことをするの？」

「簡単なものですと回復薬の原料となる薬草の採集を行ったり、装備品などの製作に使う鉱石を取ってくるなどです。難易度が高い依頼になりますと、古代遺跡の調査などですね」

「へえ、そんなものまでやるんだ」

「はい。この町では滅多にこういう依頼は来ないので、あまりないんですけどね」

そう言つて、受付嬢は苦笑いする。

あまり期待はしないでこつ。

「遺跡が近い町や大きな街ですと、それ専門のギルドがあったりするんですけどね」

「まあ、そういうのにまだ興味はないので、大丈夫ですよ」

「そうですか。では、説明を続けますね」

受付嬢は一呼吸入れて、説明を続けた。

「わたくしどものギルドへの入会は、どなたでも可能です」

「戦士ギルドみたいに入会に試験とかはあるのか？」

「いえ、ございません。ギルドへの入会の際は、簡単な書類を作成して終了です」

「へえ、それだけでいいのか」

「はい。しかし、注意点がございます」

「注意点？」

「はい。依頼を受ける際に、契約金を、依頼を担当の方が支払う義務がございます」

「どのくらい払うの？」

「それは、依頼内容によって異なります。依頼難易度が高いほど、契約金は高くなります。これは、依頼失敗の際に依頼者への謝罪金とギルドの信用を損なった罰金として徴収致します」

「依頼を達成したときは、契約金は返ってくるの？」

「はい。全額をお返しいたします」

なるほどなるほど。

これは割りと信用できそうな感じだ。

「ありがとう。他に注意点はある？」

「はい。後は、これは我々の希望なのですが、根気のある方が入会していただけると助かります」

「というത്？」

「はい。依頼内容が……その、まあ地味で、単純ですので、やめてしまわれる方が多いんですよね」

ハハハ、と受付嬢が乾いた笑いをする。

確かに、飽きるよな――

「わかったよ。説明ありがとう」

「いえ、もし興味を持たれましたら、是非ご入会下さい」

「ああ、それじゃあ」

俺はそう言っ、て、採掘者ギルドを後にした。
建物を出て、もう一度俺はポスターを見る。

……………確かに、夢を追いかけるが正解だな。

そう思いつつ 次に向かう先は 僧侶ギルドだ。

僧侶ギルド

僧侶ギルドは、町の北よりの外壁沿いに建っていた。

建物は、側面を白い外壁に、正面を黒と黄色い横線のラインが入ったもので建てられていた。

一瞬、邪神崇拜かなにかだろうかとも思ったが、文化なんてものは、人が勝手に作り出したものなので、気に留めないことにした。

入り口の脇に建てられた掲示板の高そうな紙を使った張り紙には、

「神はあなたの全てを見ている」

……………怖っ！！

なんか説明を聞く以前に、本能的に回避したくなった。

しかし、見た目だけで判断するのは早計、よくない。

ということで、俺は僧侶ギルドの開かれた門に入っていた。

中に入り少し俺は驚いた。

天井まで吹き抜けて、建物の奥まで見渡すことができる造りで、奥にはおそらく信仰している神像が掲げられ、その下を壁にそって三段に分けられた椅子が並び、それを取り囲むように真ん中に台座があった。

まるで、公開審問をするかのような造りの礼拝堂だ。

「こんにちは」

俺が見慣れぬ造りの礼拝堂にカルチャーショックを受けていると声をかけられた。

その声の方を向くと、体の中心のラインを胸から足元までを黒と黄色の基調で彩られた白い外套を着ている女がいた。

「初めてお見受けする方ですね」

「ああ、このギルドに入るか決めかねているから、一応説明だけを聞きに来たのだけど」

「まあ！ではあなたも『アルハン』様の御加護を受けに来た方なのですね」

キラキラとした目で俺を見る女。

「いや、その、『アルハン』サマのことがまず分からないけど」

「まあ！」

俺がそう言つと、女は驚いたように目を丸くした。

「失礼しました。アルハン様をご存知ないのでしたら、信仰を求めて来られたのですか？」

「いや、単にどんなギルドか気になっただけで……」

「……………」

「……………」

彼女は表情が固まったまま無言になってしまった。

ひとつ言っておかなくてはいけないことがある。

渡り人だからって、別に世渡りが上手いわけじゃないのよ！

さて、どうするか。

ここは大人しく帰ろうか？

俺がそう思った矢先、女は表情を和らげて話しかけてきた。

「これも、きっとアルハン様のお導きでしょう。分かりました。アルハン様の素晴らしさをお教えしますわ」

「え、いや、けっこうで——」

「アルハン様は——」

俺の言葉を見殺して、女は話し始めた。

仕方なく、俺は耳を貸す事にした。

彼女の話では、

- 1・アルハンというのは、この世界を作った神らしい。
- 2・全てのものに恵みと祝福を授けてくれるらしい。
- 3・黒と黄色の組み合わせはこの世の混沌を示すらしく、それを清らかに包みこむための白色だとか。
- 4・黒と黄色を使っているのは、その混沌があることを忘れず、なお清く生きるための教えだとか。
- 5・祈りはアルハンに届き、御加護を得ることができるとか。
- 6・彼女も重い病が治ったらしい。

「病が治ったってどうやって？」

「特効薬を飲みました」

え？

「それって薬のおかげじゃ……」

「いえ！アルハン様があの薬まで私を導いてくれたお陰です」

……………駄目だ。コイツ。

「あ、説明ありがとう。じゃあ俺はこれで！」

俺は足早に出ていくことにした。

「ああ、まだアルハン様の素晴らしさの一割も話していませんのに」
「ま、また今度で！」

俺は風の如くその場を去った。

取り敢えず、僧侶ギルドは選択肢から外すことにしよう。
さあ、次は魔法ギルドだ。

魔法ギルド

魔法ギルドは何やら奇妙な建物だった。

何が奇妙と言え、まず、建物の構造として奇妙だった。

まるで木が枝分かれしたようにそびえ立つ塔がいくつもある。

一言でいうと『もっさり』した感じた。

入り口だけはまともで、その横には「触れて下さい」と書かれて板があった。

だから触れてみた。

すると、宙に文字が浮かび上がり、「魔法を究めんとする者に、道は開かれる」と書かれていた。

俺はこの世界にきて初めて少しワクワクした。

少し期待しながら、俺は中へと入っていった。

中に入ると、空中を彷徨う四角い物体、色が次々に変わっていく柱など色々なものがあるホールだった。

受付は目の前にあり、下を向いている女がいた。

俺は近づいて話しかけた。

「ども」

「……………」

「もしもし」

「……………」

「あゝ」

「……………」

女は何やら手元にある本に集中しているらしく、まるでこちらに気

づきもしない。

俺はどうするか考えていると、受付の脇に、「御用の方は鳴らして下さい」と書かれたベルらしきものを見つけた。
ダメ元で俺はそのベルを鳴らしてみた。

ドガガガガガ！ドギャーン！！

「ひゃああああ！」

「うおおおっ！！」

てつきりもつと淑やかな響きの音かと思ったら、とんでもない騒音だった。

まるで、パソコンの起動音を爆撃音にされた気分だ。

「あわ、あわわわ」

女は持っていた本を落として、ずり下がったメガネを慌ててかけ直した。

「ああ、すみません。本に集中していて」

「いえいえ」

女は少し落ち着くと畏まったように何度もペコペコ頭を下げた。

俺もついつい許してしまう程だ。

「すみませんでした。それで、どのような御用でしょうか？」

「ああ、このギルドに入ろうか迷っているんだけど、まずは説明を聞きたいんだが」

「ああはい。入学希望の方ですね」

「入学？」

「ええ、対面的にはギルドとしていますが、本来の活動は学校のよ
うなものですので」

「なるほど」

ギルドだが、魔法を研究するところだから、学校として機能してる
のか。

というか、この世界には学校という施設があるんだな。どの程度か
は分からないが。

「ではまず、こちらに触れていただけますか？」

「ん？これは？」

「あなたの魔法力を調べるものです。素質がない方は残念ですが入
学は許可出来ないのです」

「なるほどね」

素質が無ければ、努力のしようもないもんな。

俺は言われた通りに、四角い透明な箱に手を触れた。

触れたが、箱には何の変化もなかった。

「ああ、残念ですがあなたには魔法の素質がありません」

「そうか。まあ俺も期待はしていなかったけど」

だって俺、召喚士だもん。

召喚する時、MPみたいなものは使っけど、実際にこの世界でい
うところの魔法力じゃないし。

本当に期待なんかしてなかったよ。本当だよ！

「まあ、折角来たんで、このギルドの説明だけでもお願いするよ」

「ええ、その程度でしたら」

そう言つてメガネをかけた女は快く引き受けてくれた。

「このギルドは、簡単に言いますと『魔法』を研究し、その成果を
売ることと運営されています」

「成果を売るっていうのは？」

「簡単なところですと、例えば薬草の効用を最大限に引き出すため
に魔法を使い、それで出来上がったものがポーションです」

「へえ、つまりポーションはここで調合されてるわけだ」

「そうですね。後は、新しい魔法技術を発明して、その方法売る
ことなどが大きなものとして挙げられます。良い研究成果であれば、
その国のお抱え魔法士になれる場合もあるんですよ」

「なるほど」

「まあ私もギルドではそういうことはまだ一度もないのですが」

「はは、頑張ってください」

この世界で魔法というものが、割りと重要な扱いであることがわか
ったような気がする。

「大雑把ですが、説明できるのはこれぐらいですね。何かご質問は
ございますか？」

「うーん。そうだな……」

俺が何か聞こうか迷っていると、視界の隅ある扉が開いた。
そこに現れたのは、真紅のローブを着た女だった。

「アリッサ！　お願い！　あと少し研究費用を私のところに回して
！」

「……またですかコーリアさん」

コーリアと受付のアリッサに呼ばれた女は、俺のことはお構いなしに受付の前を陣取った。

「あとちよつとなの！ あとちよつとで、研究が完成するのよ！」

「前もそう言つてたじゃないですか。学長からしばらくコーリアさんには費用を出さないように言われてますから無理です」

「あのクソジジイ……。ねえ、いいでしょ？ お願い」

「猫かぶつても無理なものは無理です」

「けちー！どけちー！」

完全に空気です俺。はい。

「じゃあ、俺はこれで……」

俺は出ていくことにした。

が、服の袖を誰かに掴まれた。

「……………あの」

俺が袖を掴んでいるコーリアに話しかける。

すると彼女はニヤリと笑いこちらを見つめてきた。

「ねえ？ お兄さん？ 私に資金援助しなあい？」

「しないが？」

「即答！？ ちょっと酷くない！ こんな美女がお願いしてるのに！」

「俺の好みはもっと淑やかな女性なんで」

俺がそう言つと彼女はすつと身を整えて、控えめこついった。

「お願いしますわ。あ・な・た」

「いや、やっぱり強気なしたたかな女性が好みで……」
「ほんと私に任せて投資しなさい！」

コーリアは胸をドンと叩いて高々に宣言する。

「いや、実はもっと淫靡な感じの女性が好きだから……」
「夜の方もサービスしてあ・げ・るう」

コーリアは体をクネラせて、寄り添うようにして俺の耳元でそう囁く。

「いやいや、本当はもっと甘える感じの年下の妹的な女の子が……」
「おねがいい。おにいちゃん」

コーリアは上目遣いで、目を輝かせながら満面の笑みで俺に言う。

「あんた面白いな」
「ホント！　じゃあ資金援助してくれる！？」

俺はニヤリと笑い、彼女も期待に満ちた目をして、

「だが、断る！」

「この悪魔あああああああ！！」

なんて、からかいがいのある女だろう。

「もういいから有り金全部置いてきな！」

コーリアはキレたのか俺の襟首を掴んで脅してくる。

「受付のお姉さんどうにかして」

俺がそう頼むと、アリッサは拳ほどの大きさの球体を手に持ちこつて言った。

「町の自警隊に通報しました」

「いやあああ！やめてええええ！うそ！うそです！」

コーリアはその場で悶える。

「もう！　どうしたら資金援助してくれるのよ！」

怒った様子のコーリアは、その場で地団駄を踏む。

その様子を見て、俺は一言こいつだ。

「そのままの君が可愛いよ」

「はあ！？　ちょ、ちよつと、このタイミングで口説くとかい、意味分かんないんだけど／＼」

コーリアは、そういうものの照れたように頬を赤くし、顔を背ける。そしてそんな彼女に俺はこう言った。

「あ、リップサービスーギラ（この世界の通貨の単位）になります」「死ね！死んでしまえ！！　もう知るか！　うわーーん！」

そう言つてコーリアは、建物の中に帰っていった。

「なんか騒いでわかった」

「いえ、うちの学生がご迷惑をおかけしまして」

「いや、楽しかったからいいよ。それじゃあ俺はこれで」
「はい。何か御用がありましたら、魔法ギルド『レーテス』にまた
お越しください」

俺はそうやって魔法ギルドを後にした。

なかなか面白いギルドだった。

さて、最後は盗賊ギルドだ。

魔法ギルド（後書き）

戦士ギルド『スラッシュ』から『ドーン』に変更。
ダサかったので

盗賊ギルド

盗賊ギルドに足を運ぶと日が暮れそうだったので、俺は先に宿屋を探した。

最初に見つけた宿屋は一泊8ギラとお手軽な値段だったので、そこに決めた。

この世界の通貨は、鉄棒^{ペラ}10円、銅棒^{ギラ}100円、銀棒^{ジン}1000円、金棒^{ゼラ}10000円という形で成り立っている。

つまり8ギラは800円として計算できるので、かなり感覚としては安いと分かるだろう。

そういうことで、宿の決まった俺は、夕暮れと共に盗賊ギルドのある場所に向かった。

人に聞いてようやくたどり着いた盗賊ギルドは、清潔感のない建物で、場所も町の中でも狭い路地を通らないと来れないような分かりにくい場所にあった。

如何にもな感じを漂わしている。

しかし、これより危なげなところに、他の世界でも行ってきた俺は、別段躊躇すること無く入っていった。

建物の中は、大きなホールになっており、ホールの中にはテーブルがいくつか置いてあり、奥にバーのように酒が並んだカウンターがある。

カウンターの脇には階段があり、二階の部屋につながっているようだ。

ホールのテーブルに腰掛けている男たちは如何にも荒くれ者といった感じで、品性という言葉には無縁な人間だろう。

男たちは入ってきた俺をジッと睨むように視線を浴びせた。

俺は取り敢えず、奥にあるカウンターにいるバーテン？に話しかけるため、足を進めた。

カウンターの席に座ると、バーテンがこちらを見てきた。

「……………」

しかし、バーテンは何も話さない。

しばらく、バーテンが話しかけてくるのを待ってみると、バーテンは顎を上げて自分の後ろにある酒棚を指した。
酒を頼めということだろう。

「あんたのオススメで頼む」

俺がそう言つと、バーテンは黙って体を動かして、すぐに瓶に入つた酒をグラスに注ぎ、俺の前に置いた。

俺は少し口をつけると、深みのある味わいが広がり、悪くないと思つた。

「依頼は？」

唐突にバーテンが口を開いた。

どうやら俺を依頼人と間違えているらしい。

「いや、このギルドが何やってるかの説明を聞きに来たんだが」

「……………」

バーテンはもう話すことがないかのように俺から距離をとった。
そしてその後すぐに爆笑の嵐がホールに響いた。

「おいおい。聞いたかみんな！『このギルドが何やってるかの説明を聞きに来たんだが』だってよ！ギャハハハ！」

そう言いながら、俺に近づいてきたのは、ガラの悪いやせ細った男だった。

「お前。馬鹿か？それとも頭でも腐ってんのか？」
「いや、本当のことだ。説明を聞きに来ただけだ」

俺がそう答えると、男は下品にまた笑った。
そして俺の襟首を掴んでこう言った。

「ばあああかか？テメエ。このギルドにそんなもんはねえよ。『金になる依頼は何でも受ける』それだけだ」

「ああ、なんだお前が説明してくれるのか？悪いな？」

「あつ！？ふざけんのかテメエ？」

男の顔が険しくなる。

このチンピラAはどうも短気らしい。

「ま、ようは済んだみたいだから帰るよ」

俺がそう言っただけで男の手を振りほどいて、出口に向かおうとするとチンピラAがその進路を塞いだ。

「バーカ、逃すわけねえだろ？ 痛い目見たくなきゃ身ぐるみ全部置いてって、返って母ちゃんのおっぱいでも吸ってな！」

チンピラAはニヤニヤと笑い、そんなことを言った。

その返しとして俺は取り敢えず、こう言った。

「顔を近づけるな。息が臭い」

「んだとっ！」

「臭っ！この世のものとは思えないほど臭っ！マジ止めて！」

俺が鼻をつまんで、嫌悪感を丸出しの表情をする。

いや、本当に臭いんだよ。

するとチンピラAは顔を真っ赤にして、青筋を立てた。

「て、テメエ。ぶ、ぶっ殺してやる！！」

チンピラAは懷からナイフを取り出して、構えた。

俺は、どうしたものかと安い挑発をしてしまったと後悔しつつ思っている、一息間を置いて、ホールが急に静かになった。

「何を騒いでやがる」

野太い男の声の方を振り向くと、そこには二階から降りてくる髭面の男がいた。

「だ、ダンナ……」

「おう、パッチ。テメエ何してやがる」

髭面の男は、険しい顔でチンピラAを睨む。

チンピラA改め、パッチはそれだけで、体がすくみ上がってしまった

た様子に見えた。

「だ、ダンナ。こゝこの野郎が俺をバカにしやがったんですさあ…

…」

「あ？テメエはそんな理由で、俺のこの『シヤムシヤテイ黒猫の宴』を薄汚ねえ血で汚そうとしやがったのか？」

「すゝいやせんでした！！」

パッチは髭面の男に凄まれ、その場で膝と両手をついた。
まあ俺空気ですか。

「じゃ、俺帰るんで」

「待ちな坊主」

俺がそう言つて立ち去ろうとすると、呼び止める声がかかった。

「なに？」

「テメエも誰に断つてこの場所に入ってきてんだ？」

「いや、誰にも断りなんか入れてないけど？」

「あん？」

俺の態度に、髭面の男は眉をひそめた。

「オメエ、何のようでここに来やがった」

「このギルドの説明を聞きに来ただけだけど」

「……それでこの騒ぎか」

「あんたが收拾つけてくれて助かったよ」

俺はにこやかにそう答える。

髭面の男はそれを見て、口を開く。

「死にたいのか？」

男がその言葉を発した途端、場の空気が異様に暗く、重いものとなった。

周りを見ると、先程まで馬鹿騒ぎしていた男たちの表情も固くなっている。

その空気を読んで、俺はこう答えた。

「あんたアホか？好き好んで死にたい奴なんかそう簡単にいるかよ」

場の雰囲気にあつたナイスチョイスなセリフと思って俺がそう答えると、場の空気は和やかに……………はならなかった。

むしろ、余計緊張が走つたような気がする。

髭面の男はしばらく、こちらをジッと睨んでいる。

……………このおっさんがガチホモだったらどうしよう。

「デメエ今から俺の質問に答えろ」

髭面の男はそう言って口を開いた。

「だが断る！」

「それを決めるのは俺だ」

な、なん…………だと、俺の「だが断る」を打ち破る返し方があったのか。

髭面の男は別段気にした様子もなく言葉を続けた。

「今お前は、三日間何も食わずに平地を放浪している。」

最寄りの町にはもう少しで着く。

しかし、前から化け物モンスターに追われている男がこちらに向かってきている。

男はお前に助けを求めた。

男は報酬を支払うと言っている。

しかし、男を追っている化け物モンスターは、今のお前では勝てるかどうか怪しい。

さてこの時、お前は どうする？

「男から金だけ奪って、その場を去ってさっさと町で飯を食う」

髭面の男の禅問答のような質問に俺は即座に答えた。

「理由を聞こうか」

髭面の男は、こちらを値踏みするように見てくる。

「そりゃあ、全く見ず知らずの他人のために、命張るわけにも行かないし、その話だと、自分は金を持っていない可能性が高い。つまり、町にただ着いても食料を確保する可能性は極めて低い。すでに三日も食ってないわけだしな。そしたら、金を持っているやつから有り難く頂いて、ついでにモンスターの身代わりになってもらう、まさに一石二鳥とはこのことだよな。さらに平地で他に誰も見てないところが美味しいよな」

俺がスラスラとそう答えた。

俺の答えにパッチは青ざめたような表情をしていた。

しかし、髭面の男はそれを聞いてニヤリと笑った。

「合格だ」

「なにが？」

「オメエはこれからこの盗賊ギルド『シヤムシヤテイ黒猫の宴』のメンバーだつてことだよ」

「は？」

何を言っているでしょうか？このおっさん。

「嫌だ」

「それを決めるのは俺だ」

「だが断る！」

「無理だ」

「じゃあ逃げる」

「逃がすと思つてんのか？」

髭面の男が右腕を上げると、周りの男達が一斉に立ち上がった。

「俺の名前はアーカムズ。これからお前のボスになる男の名前だ。覚えておけ」

「四文字以上の名前は覚えられないんだ。悪いね」

「なら覚えさせる。……やれっ！」

アーカムズが上げた右腕を下げると、周りの男たちが飛びかかってきた。

俺は焦ること無くこう言った。

「来い。影に生きしもの、『アシカゲシノビ』」
「参上仕る。我、『アシカゲシノビ』」

何もない空間から顔のない黒ずくめの男が現れた。襲いかかってきた男たちに動揺が走る。

俺はその好機を逃さない。

「俺を隠せ」

「承った」

そう答えた《アシカゲシノビ》は、両手を活き良いよく広げた。広げた両手から白煙と黒煙が立ち、そして弾けた。

「うわ、なんだこの煙！」

「ゴホツゴホツ！くそ！」

「何も見えねえ！ちくしょう！」

男たちは急に起きた現象に戸惑い怒鳴りあう。

「全員落ち着け！」

アーカムズの一喝で男たちは落ち着きを取り戻した。

だが、彼らの視界が回復する頃には、俺はもういない。

ちよつと禍根を残しそうな逃げ方をしたが、まああの状況では上出来な方だと思う。

これで、この町の全てのギルドを見て回った。

さて、どのギルドに入るかは、宿屋で落ち着いて決めよう。

そう思いつつ、俺は宿に帰っていった。

ギルド・イン

宿屋で一夜を過ごした俺は、とあるギルドの目の前に立っていた。

採掘者ギルド「掘る者の集い」^{ミレラリオ}だ。

……どうせ戦士ギルドとか予想してただろ？

モブの名前も無き受付嬢しか出なかった採掘者ギルドなんて一片足りとも脳裏を掠めなかっただろ？

でも採掘者ギルドなんだな！これが！

採掘者ギルドをなぜ俺が選んだかの理由は、依頼をこなしていると
きにも話そう。

ということで、俺は採掘者ギルドに登録すべく、その門戸を叩いた。

「ようこそ採掘者ギルド『ミレラリオ』へ！……ってあれ？あなた
は確か昨日の」

「登録を頼む」

「へ？」

「登録します」

「……本当ですか？」

「本当です」

俺が受付に近づきながらそう言つと、受付嬢は顔を下にむけてプル
プルを震え始めた。

……後ろ暗い冷たい薬の副作用か何かだろうか？

俺は心配して声をかけた。

「大丈夫か？」

「い、いつやったーーーーー!!」

「のわぁ!？」

受付嬢は勢い良く天に向かって渾身のバンザイをした。

「いやあもうホント助かります！ 最近新しい人が入らないわ、人はどんどん辞めてくわで、大変だったんですよー」

「そ、そうですか……」

「ありがとうございます！そしてありがとうございます！」

受付嬢はブンブン俺の手を掴んで何度も振る。

「さあさあ！ちゃっちゃと登録を済まして、バンバン依頼をこなしてくださいね！」

「あ、ああ」

「取り敢えず、この用紙の必要事項を記入して下さい。あ、字は書けますか？」

「問題ない」

俺は受付嬢の勢いに押されながらも、書類にペンを走らせる。

名前…… 年齢…… 性別…… 住所…… 特技…… 過去に患った病気…… くん？……………。

「あの」

「はい何でしょうか？」

「この『性癖』ってのは……何？」

「あ、それはジョーク項目です」

「……………」

「えーと、ほら！うちのギルドって地味じゃないですか。だからちよつとユーモアを入れたほうがいいかなーと思って、その、私が…」

お前かよ！

っていうかこのギルド大丈夫だろうか？今更だが心配になってきた。取り敢えず、「スカ　口以外は何でも」と書いておこう。

「はい。書けたぞ」

「ありがとうございます」

そう言つて受付嬢は、各項目を目で確認していく。

受付嬢が用紙の下の方に目を移して、おそらくさっきのジョーク項目のところで、目の動きが止まった。

そして受付嬢はこちらを向いてニコツと笑顔を作る。

「ケンイチ様。私、アミユットと申します」

「なぜ今、このタイミングで自己紹介をする……」

「以後良しなに……ポツ」

「なぜそこで頬を染める！？」

ユーモアというか、お前の男あさり用の項目かよ！！
シジョウチヨウサ

「取り敢えず、早速今日から動くから」

「わあ、助かります」

「そうだな……。薬草集めの依頼はあるか？」

「はい。10件ございます」

「じゃあ全部頼む」

「え？あー申し訳ございません。依頼の同時契約は最大で3件まで何ですよ」

「そうなのか。まあだったら3件よろしく」

「はい。……えーと、大丈夫ですか？」

「問題ない」

「そ、そうですか。では、こちらから3件選んで下さい」

アミュットはそう言っただけで俺の前に「依頼書」の束を置いた。
俺はざっと見て次の3件を選んだ。

「薬草10枚一束で、5束以上。10束以上には追加報酬」

契約金：8銅棒^{ギラ}

報酬：2銀棒^{ジラ}

「ポーション製作用の青薬草を30枚」

契約金：1ジラ5ギラ

報酬：10ジラ

「緊急募集！薬草を7束」

契約金：5ギラ

報酬：3ジラ5ギラ

俺は契約金の2ジラと8ギラと一緒にサインした依頼書をアミュットに渡した。

アミュット心配そうにそれを受け取り「受託印」を押した。

「あの、この3枚ですが、期限が今日と明日のものですが大丈夫ですか？採集する量も多めですし」

「大丈夫大丈夫」

「そうですか……」

「とりあえず、この薬草と青薬草のサンプルってあるか？」

「ええ！現物を知らないでこんなに受けちゃったんですか！？」

「大丈夫大丈夫」

「も、もう、知りませんよ……」

アミユットはさらに不安な表情のまま奥の扉に入り、薬草と青薬草を一枚ずつ持ってきて、俺に見せた。

薬草は、カエデの葉の形に似たもので、青薬草は、その葉より青々としたものだった。

「これ買い取るからもらえるか？」

「え？あ、はい。それは構いませんが……」

「んじゃま精算ヨロ」

俺はそういつてアミユットから薬草を買取った。

「そんじゃま行ってくるわ」

「……はい。いつてらっしゃい」

「ういいうい」

俺はそういつて建物から出た。

去り際後ろから「大丈夫かしら……」という声が聞こえたが、まあ待ってろって。

俺は早速町の外へと進路をとった。

ギルド・イン（後書き）

今日から時間が出来たので、また更新してきます。

召喚術の活用法

町の外に出て、ある程度歩いたところで、俺は召喚をすることにした。

「召喚せしは、《タンサクソウサ》」

「応えしは、我、《タンサクソウサ》」

召喚したのは、この世界に来て一番初めに呼んだ望遠鏡のウニみたいな《タンサクソウサ》である。

俺は薬草と青薬草を取り出して、《タンサクソウサ》にそれらを見せた。

「こいつが生えているところまで案内してくれ」

「了解した」

そう言つて、《タンサクソウサ》は宙に浮かび上がり回転を始めた。そして回転を止めて言う。

「主が足で、東に1刻ほど歩いた森に入り、さらに300歩直進したところに目標物を複数発見した」

「オツケー。お疲れさん戻っていいぞ」

俺がそう言つと、《タンサクソウサ》はまた何もない空間へと帰っていった。

俺は早速東に進路をとった。

森に着き、しばらく歩くと少し開けた場所に出た。

その地には、自的の薬草と同じものがいくつか生えていた。
しかし、ざっと見た限りだと依頼達成に必要な数は無さそうだ。
まあ想定済みだけだな。

そう思った後、俺は精神を集中した。

「解き明かせ、《ブンセキカイメイ》」

「問いに答えましょうぞ、私、《ブンセキカイメイ》」

俺の呼びかけに応えたやつは、白衣を着た老人で、その背丈は手のひらに乗るサイズ。さらに老人の髭と髪は細かい文字や記号の集合で出来ている。

そして、さらに俺は呼び掛ける。

「恵みをもたらせ、《ハウジョウドジョウ》」

「育て咲かせよお！ オデ、《ハウジョウドジョウ》」

続いて呼びかけに応えたやつは、俺の二倍ぐらいの背丈で、人の形をとっているが体表は土塊で出来ており、体のあちらこちらに苔や草や花を生やしている。

これぞ。同時召喚なり！

「よし。まずは《ブンセキカイメイ》。この薬草を調べてくれ」

「うむ。任せなさい」

そう応えた《ブンセキカイメイ》は、薬草と青薬草を手に取り、眺めるように見ていく。

途中ウンウンと頷き、そして最後は文字や記号で出来た髪と髭が浮かび上がり、薬草と青薬草をそれで包んだ。

「ふむ。解析終了じゃ」

「よし。それじゃあ解析結果を《ハウジョウドジョウ》に渡してくれ」

俺がそう言つと、《ブンセキカイメイ》は手のひらから文字や記号が渦巻いている球体を取り出し、それを《ハウジョウドジョウ》の方へ投げた。

《ハウジョウドジョウ》はそれを口から食べてもぐもぐする。

「よし。《ハウジョウドジョウ》。おまえはそれを元にこの辺にそれを大量に生やしてくれ」

「任されたぞお！」

《ハウジョウドジョウ》は、大きく手を振りかぶり、そして勢い良く地面を叩きつけた。

ドゴン！と鈍く重い音が鳴り響き、そして同時に雑草が生えていた地面は浮かび上がり、瞬く間に薬草が一番良く育つように耕された。そして今度は高く飛び上がり、両足でおもいつきり着地する。

すると、なんとこの事でしょう。

何もない土から薬草と青薬草がわんさか生えてくるではありませんか。

ニヨキニヨキ、モサモサという効果音が一番適切であるようにすごいスピードで大量に生えてくる。

一言で表現すれば、「国民的アニメ映画の女の子二人がパジャマで夜の外でジャンプしているシーン」である。

「よし。計画通り！ お疲れさん。二人とも戻っていいぞ」

「ふむ。また困ったことがあれば呼ぶのじゃ」

「オデ、腹減った」

《ブンセキカイメイ》は快く戻ってくれたが、《ハウジョウドジョウ》は戻るのを渋っている。

召喚された者の中には、俺の精神力（仮）以外の報酬を求めることがある。

そうだった場合、しっかりそれに応えるのが召喚者とされた者の信頼関係を築くのに重要な点である。

「オッケー。取り敢えず、この辺の木の实を取ってくるから、それまで見張っておいてくれ」

「うん。わかったぞ」

俺はそう言い残して、森を駆けまわった。

しばらくして、両手に持てる分だけ木の实や果実を取って戻ってくると、《ハウジョウドジョウ》の周りには、鳥や森の小動物が休んでいた。

相変わらず、動物に好かれてるなーと思いつつ俺が近づくと、動物たちは敏感に反応し、逃げてしまった。少し悲しい。

「ほら。これで腹の足しにしてくれ」

「うおー！ありがとうだぞう」

《ハウジョウドジョウ》に木の实と果実を渡すと、あっという間にそれらを食べてしまった。

「んだ。オデ帰るぞ」

「おう、お疲れさん」

そう言って帰っていった。

それを見送った後、俺は軽い茂みのように生えた薬草と青薬草をあるだけ採集して、町へと帰還した。

楽勝楽勝。

こんな楽してノルマ達成とか、召喚マジでメシウマ!!

始めての報酬

道具袋がパンパンになるくらいの薬草を持って、俺は再び採掘者ギルドへと戻ってきた。

「おーす。戻ったよー」

俺が言いながらギルドに入ってくると受付のアミュットは驚いたような顔をした。

「おかえりなさいケンイチさん。まだ半日も経ってませんが、まさかやっぱり採集できなくて諦めて帰ってきたんですか？」

アミュットはがっかりとした表情でため息をついた。
失礼なやつだ。

「ほら。依頼達成だよ」

俺は受付の上にドサツと薬草でいっぱい^{ミレラ}の道具袋を乗せた。

「え！？ ほ、本当ですか？」

「疑う暇があったら確認する方が早くないか」

「うっ、そうですね。では……」

そう言つて、アミュットは道具袋の口を広げて中を確認し始めた。

「う、嘘。これも、これも、青薬草までこんなに！」

彼女は信じられないといった表情で、次々と薬草を確認していく。

俺はその様子を欠伸しながら、眺めていた。

「に、偽物じゃ、ないですよね？」

「採掘者ギルドの受付嬢なら薬草の真偽ぐらい自分でわかるだろ」

俺がそう言つと、アミユットはうつむいてプルプルし始める。
来るか？来るのか？

「すつつごおーい！い！い！い！　すごい！すごい！」

予想通りでした。

鼓膜が破れそうぐらいアミユットは大喜びしている。
というか、今回は跳ねている。

「どうしてですか？こんな短時間でしかもこの量！すごいじゃないですか！」

「まあ、俺は有能だからな」

ここまで大喜びされるとちよつと鼻が高くなってしまう。

「まあ取り敢えず、依頼達成の手続き頼むわ」

「はい！今すぐに！」

そう言つて、アミユットは満面の笑みを浮かべながら、書類にペンを走らせて、「依頼達成印」を押した。
そして報酬が俺に渡される。

基本報酬：15銀^{シラ}棒、5銅^{ギラ}棒

契約金返金：2ジラ8ギラ

計：18ジラ3ギラ

俺は取り敢えず報酬を確認して、暑い布袋で出来た財布に入れる。
ちなみに薬草は、まだ大分残っている。

「よし。それじゃあ新しく3件の薬草採集系の依頼をくれ」

「え？またすぐに受けるんですか？」

「まあまあ見とけて」

俺がそう言つと、アミユットは依頼書を持ってくる。

俺は適当に3件選んでサインする。

「ほい。受諾印ヨロ」

「あ、はい。契約金も一緒をお願いします」

「はいはい」

俺が契約金を渡し、アミユットは受諾印を押してこちらに渡す。

そして俺はそれを確認して、アミユットにまた渡す。薬草と一緒に。

「依頼達成印ヨロ」

「え？あーなるほど。そういうことですね」

アミユットは納得がいったのかまだ余っている薬草から、依頼分の枚数を抜いて、依頼達成印を押す。

そして俺は契約金と報酬をもらう。

そして、薬草はまだ残っている。

後はお分かりだろう。

以下略

「す、すごい。10件もあった依頼が一瞬で……!!」
「ははは、いやー儲かった儲かった」

アミユットはニコニコしながらも、依頼の消化に驚き、俺も金が儲かってホクホク顔。

今回の報酬は合計72ジラ3ギラとなった。

日本円で7万2千3百円。

さらにこの世界は物価が安いから感覚的にはもっと稼いだことになる。

「うわあ、ケンイチさん、すごいです。本当に」

「もつと褒めたまえ。ははは!」

「えらいえらい」

「いや、子供扱いしろとは言っていないのだが」

アミユットはなでなでと俺の頭を撫でた。まあ悪い気はしない。

「でも、どうやってこんな量を集めてきたんですか？」

「まあ色々だね。そのへんは」

「えーいいじゃないですか。教えて下さいよ」

「いやだ」

「もう!……じゃあ、お姉さんからのお・ね・が・い」

「そんな安っぽい色仕掛けで俺がなびくとも?」

「ひどい!これでも自信あったのに!……でもそんな硬派なところもス・テ・キ」

何故かアミユットはうつとりした感じの目でこちらを見つめてくる。まあアミユットの容姿はまあまあ好みなので、ちよつと遊ぶぐらいなら……

「さつきから珍しく騒がしいのう」

俺が良からぬことを考えていると、ギルドの二階から声と同時にこちらに降りてくる足音が聞こえた。

「あ！ギルド長。見てくださいよ！溜まっていた依頼が10件も達成されたんですよ！」

「なに！？どれ、ちよつと見せてみなさい」

一階に降りてきた爺さんは、白に焼けた少し汚らしい肌だが、着ているものは小奇麗で、人物と同じく年季の入った重厚感のある身なりであった。

爺さんはアミュットから渡された依頼書と、俺が採ってきた薬草を眺めて、何度も頷いた。

「ふむ。問題ないのう。むしろ薬草は虫食いもなく、全て上質なものじゃな」

「わあー。ギルド長が言うなら間違いなく本物なんですネ！」

「まだ疑ってたんかい！」

「えーだって、こんなに早くこの量の薬草手に入れてくるなんて信じられなくて」

俺がアミュットを睨むと、アミュットは気まずそうに小さくなる。

爺さんは俺の方に向き直ってこう言った。

「お前さんは？」

「人の名前を尋ねるときは、まず自分からだろ？」

「け、ケンイチさん！？」

失礼な爺さんにそう言つと、アミュットは手をブンブン出鱈目に振

りながら慌てる。

爺さんはそんな俺の言ったことを気にもしないように豪快に笑う。

「ガハハ！こりやあまた生意気な坊主が来たもんじゃな！」

「爺さんも如何にも偏屈そうだな」

「ガハハ！」

「ははは！」

「あわわわわ」

なかなか話のわかりそうな爺さんだ。

ブンッ！

サッ——スカッ！

と思ったら、爺さんがいきなり木の棒で俺の頭を叩いてきた。まあ避けたけど。

「何すんだよ」

「誰が偏屈じゃ！失敬なガキじゃ！」

「ぶん殴ってくる爺さんも大概だがな」

「まあ、腕は立ちそうだからな、これから精々身を粉にして働けい」

「爺さんが俺の前で膝をついて懇願するなら考えてやろつ。……いや、やめよう。そんな姿を見ても誰も得をしない」

「なに！失礼なやつじゃ。どれ見ておれ！」

そう言つて、爺さんは俺の前で膝をついて……

「つてなにやらすんじゃい！」

「あんたが勝手にやっただろう！？」

「まあ良い。お前さんの頭を引っぱたいてやるから、また明日来い！」

爺さんはそう言って、ズカズカと二階に帰って行った。
なんだそりゃあ？

「ふふふ」

「急に笑ってどうしたアミユット。頭でも打ったか？」

「もう！そんなんじゃないですよ！ただ、ギルド長が気に入った人
って久しぶりで」

「え？どう見ても嫌われたようにしか見えないけど？」

「嫌われるようなことをしているって自覚があるなら、しないでく
ださいよ。心臓に悪いですから」

「どんまい」

「もう！でも、ギルド長って気に入らない人だと『二度と来るな！』
いつも言うんですけど、ほらさっきは『また明日来い！』って言っ
てたでしょ？」

「ギルド長……なんというツンデレ」

「つ、つんで？」

「いや、気にするな」

「は、はあ」

取り敢えず、このギルドに入っただけの幸先は良さそうである。

「そんじゃま、また明日来るわ。お疲れ」

「あ、はい。お疲れ様です。また明日！」

「あいよ」

そう言って俺はギルドから出ていった。

幕間

「アミユットよ。あの若造はもう行ったか？」

「ギルド長。いたんなら見送ってあげればいいのに」

「ふん。最初から甘やかすと面倒じゃからな。あの手の男は」

「そうなんですか？」

「そうじゃ」

「ふふ。でもギルド長うれしそうですね」

「嬉しくないわい！」

「ふふふ。でも本当にすごいですよね。初日からこの活躍」

「確かにのう」

「ここは、彼がやめないように私も頑張らなくちゃ！」

「なにを頑張るんじゃ？」

「えー!? そ、そんな……口になんて出せませんよ! もう!」

「……………若いうちからそんな方法で男を捕まえるのは止めなさい」

「えー。若いうちしか出来ないと思いますけど。…………それにケンイ

チさん。なんだかんだ言って床^{とこ}では優しそうだし」

「そうかのう。この登録書からは相当の変態趣味の持ち主のように感じるがのう」

「それはそれで…………いやん」

「これから、色々と忙しくなりそうじゃ…………」

「あら、忙しいことはいいいことじゃないですか」

「まああのう」

以上、ケンイチ退出後のギルドの中の会話。

一週間後

ゼーの町に到着してから一週間が経った。

その間の経緯を簡単に書き記そう。

- ・依頼を順調にこなす。
- ・町で部屋を借りた。
- ・町での知名度が「誰だこいつ」から「たまに見かけるやつ」ぐら
いに上がった。
- ・教えてもないのに、アミユットが俺の部屋に頻繁に顔を出すよう
になった。↑何これ怖い……
- ・ギルド長のじじいと依頼あがりに酒を飲みに行くぐらいの仲にな
った。
- ・未だにギルドの他のメンバーに会ったことがない。

さて、こんな感じだ。

今現在の俺はというと、今日は近くの開放鉱山（基本誰でも入れる）
から依頼内容の品である「鉄鉱石」「天然粘土」を採掘してきて、
丁度ギルドに着いたところだ。

「ただいまー」

「あ、ケンイチさんお帰りなさい♪」

「ほい、依頼達成の確認ヨロ」

「はい。ちよつと待っていてくださいね」

俺は依頼品をアミユットに手渡すと彼女は手馴れた手つきで確認し
ていった。

「なあ、アミュット」

「はい。なんですか？ 今日のデートのことですか？」

「んー？ おかしいな。そんな約束はした覚えがないのだが」

「私が勝手に決めておきました」

「俺の予定は俺が決めるので却下だ」

「えー。いい加減、手ぐらい出してくださいよ」

「無理。なんか怖いから」

「ぶ」

アミュットは頬を膨らませてむくれている。

人の住所を勝手に調べて押しかけるようなスト子（ストーカーな女の子）にどうして好意を持って行為に及べようか。いや及べまい。

「そんなことよりさ。俺まだこのギルドの他のメンバーに会ったことないんだけど、……いるの？」

「……それはいますよ。当たり前じゃないですか……」

「じゃあなんで目を反らすんだよ」

「気のせいです」

「いやいや事実ですよ」

何か後ろめたい事情でもあるのだろうか？

俺がそんなことを思案していると、二階からギルド長のじじいが降りてきた。

「おうじじい、ちょっと聞きたいことがあるんだけど」

「それが、人にものを聞く態度か！」

「まあまあ、そんな細かいことは気にするなよ。俺とじじいの仲じゃないか」

「馬鹿もんが！ 親しき仲にも礼儀ありと言っじゃろうが！ それにお

前さんなんかと仲良うなりたくないわ」

「安心しろ。俺だってじじいでフラグ立てるとか、死んでもお断りするぜ」

じじいEDとか誰得だよ。

「まあ下らないことはその辺に置いておいて、俺まだ他のギルドメンバーと会ったことないんだけど、そいつらについて教えてくれよ」
「ふむ。なんじゃそんなことか。お前さんの他に二人おるぞ。以上！」

「説明みじかつ！しかも少nahm！」

「じゃあしい！！うちは少数精鋭なんじゃ」

おそらく、このじじいの気難しさに多くのメンバーが去って行ったに違いない。

美少女のツンデレはまだ許容できるし、時と場合によっては、むしろ好感さえ抱く。

しかし、誰が好き好んで小汚いじじいの元で働きたがるか、しかも無意味に若干ツンデレ……ウザさ1200%！！って感じたな。

「じじいが全て悪い」

「なんじゃと！」

「もつとじじいが近所に住むような当たりの柔らかい老人みたいな性格だったら、きっとこのギルドはもつとメンバーが増えるだろう。完」

「勝手に終わらすんじゃない！それに余計なお世話じゃ。中途半端なやつが来られても困るからのう」

それは言い訳だろう。

「まあでも、そのピンチに現れたのが、この俺ってわけだ！感謝しろよ！」

俺がそう言つと、アミユットはうんうんと頷いているが、じじいは苦虫を噛んだような顔をしている。

「ふん。お前さんがいなくとも、このギルドはやってけるわい。自惚れるじゃあない」

「あ、そ、じゃあ俺辞めるわ」

「え？」

「は？」

「世話になったな。それじゃあ！お元気で！」

「ちょ、ちょっと待ってくださいよー！ギルド長ー！」

「おおおおお、落ち着くのじゃあ、」

お前が落ち着けて。

俺は慌てた様子のじじいを見てほくそ笑みながら、二人の方に振り返った。

「冗談だよ。冗談」

「な、なんじゃ。紛らわしい……」

「もう。こういう冗談はやめてくださいよ」

つてか二人のリアクションを見て、如何にこのギルドが窮地に立たされているか分かったような気がする。本気で辞めるか検討しなくてはいけないな。

「さて今日はまだ日が出てるし、簡単な依頼でもしようかな」

「はい。あ、でも溜まっていた依頼のほとんどはさっきのやつで、終わってたんでした。今は依頼待ちの状態ですね」

「あーそうなんだ。そんじゃま暇つぶしに町でもぶらぶらしますかねー」

俺は体を伸ばしてそう呟く。

「若いもんが昼間っから遊ぶもんじゃないわい。ほれ、新しい依頼じゃよ」

じじいは懷から封に入った依頼書を取り出して、俺に手渡した。それを見たアミユットは軽く目を開いて驚いた表情を見せた。

「珍しいですね。ギルド長に直接依頼願いが出されるなんて」
「まあのう。協働依頼じゃから、わしのサインがないと受けられんからのう」

「協働依頼なんて久し振りですね」
「なあ、協働依頼ってなんだ？」

俺がそう聞くと、アミユットはこちらを向いて説明を始めた。

「あ、協働依頼っていうのは、うちのギルドと他のギルドや施設が協力して行なう依頼のことです」

「へえ、そんなのがあるのか」

「まあ、他所のギルドは結構あるんですけど、うちの場合は割りと一人でこなせるものばかり扱っているのです」

「なるほど。確かにね」

つまりその協働依頼ってのが俺に回ってきたということか。

「まあ、お主は口は悪いが腕は確かのようにゃからのう。ものは試しというわけじゃ」

「寝めるなら素直に寝ろよ。周りくどい」

「うるさいのう。お前さんみたいのは、そうやって付け上がるからこつちとしても素直に寝めれんのじゃ！」

「はいはい、気をつけるよ。んで、どこのギルドとの協働依頼なんだ？」

「戦士^{ドードン}ギルドとじゃ」

「ふーん。依頼内容は？」

「自分で読むんじゃない。わしは疲れたから部屋に戻る」

「あ、おい」

じじいはそう言い残すとのっそのっそと二階にあるだろう自分の部屋に戻っていった。

「なんだ。あのじじい」

「取り敢えず、依頼内容の確認をされてはどうですか？」

「それもそうだな」

アミュットに促されて、俺は依頼書を確認するために封を開けた。依頼内容はこうだ。

依頼形態：協働

依頼内容：バーレーイ山の中腹に生息する月光草を3枚採集

注意：1・月光草は数が少ないため、3枚以上の採取は行わないこと。

2・途中、町近郊には生息しないような凶暴なモンスターがいる可能性あり。

契約金：10銀^{シラ}棒

報酬：1金^{ゼラ}棒（経費も含んで）

依頼内容を確認した俺は、初の金棒報酬の依頼に少しワクワクしてしまった。

報酬が高いということはそれだけ、依頼の難易度が高いということだ。

「なあ、アミユット」

「はい何でしょう」

「協働依頼の場合の報酬の分け前ってどうなんだ？」

「ああ、それは大丈夫ですよ。こちらの依頼書に書いてあるのが、うちのギルドで支払われる報酬になります。他のギルドの方はそのギルドの依頼書に書かれた報酬を受取るはずですよ」

「なるほどね。……でもということは、ギルドによって報酬額が違う可能性があるのか？」

「はい。そうなりますね」

「依頼の報酬額のことは、他のギルドのやつに言わないほうがいいかな？」

「そうですねー。言っても基本的には、そういう仕組みであることを理解して依頼を受けているはずなので、問題ないと思いますけど、聞かれない限りは答えなくてもいいんじゃないですか」

「それもそうだな」

下手なイザコザはゴメンだしな。

「よし。それじゃあこの依頼受けるよ」

「はい。わかりました。それでは受諾印を押しますね」

こうして、俺は他のギルドとの初の協働依頼を受けることになった。アミユットが確認したところ、戦士ギルドの方でも依頼受諾が成立

したそうなので、夕方から出発することになった。
アミユットには勝手に俺の部屋に侵入しないように言い聞かせておいて、おそらく依頼中に野宿をするだろうから、その準備のために町の商店へと向かうべくギルドを後にした。

依頼開始と新たな出会い

日もいい具合に傾き、夕日が暖かく町を包み始めた頃に、俺は町の門の前まで来ていた。

「そろそろ戦士ギルドのやつが来るはずだけど……まだか」

俺は周りを軽く見回すが、それらしい風貌のやつはまだいなかった。今回の依頼を脳内で確認しておこう。

依頼内容は、ハーレーイ山の中腹に生息する月光草を3枚採取することだ。

ハーレーイ山はゼーの町から西に歩いて1日行ったところにある標高800メートル程度の山だ。

山までの道のりはそれほど危険はないが、山の麓にある森には町の周りにいるモンスターより危険なものが徘徊している。

依頼の月光草は、夜に月明かりのような淡く白い光を発光する植物である。

月光草は一枚を抽出するだけで、ポーションと同じ効き目のものを150〜200個作れるという貴重な植物である。

月光草を濃い濃度で抽出すれば、大抵の病気は治る特効薬が作れるそうだ。

まあ価格はとんでもない額になるだろう。

これが、野宿の準備をするために立ち寄った道具屋で聞いた内容だ。道のりと月光草の搜索を含めるとだいたい3日ぐらいの依頼となるだろう。

今回は実物を持っていなく、『タンサクソウサ』は使えない。

また実は《タンサクソウサ》は夜目がきかない。夜にしか月光草はその特徴を現さないの、使ってもくたびれ損なのである。

「あの、もしかして採掘者ギルドの方ですか？」

「ん？」

思考の海に潜っていた俺に誰かが話しかけてきた。

そちらに目をやると、そこには外套を被り、その中には軽装の鎧を身につけた少女がいた。

背丈は俺のより頭ひとつ低く、背中にはその背丈に不釣り合いな大剣を背負っている。

あえて特徴をあげるとしたら、顔にはまだ幼さがありありと残っていて、くりつとした丸い目と丸みのある赤い頬、丸い形の耳というなんというか「丸い」少女だった。

まあ体型を見るかぎり、太っているとかぼつちやりしているというわけでは無いことが分かる。

俺は少女の問いに答える。

「そうだが、あんたは？」

「あ、私は戦士ギルドの五番隊所属のニノンです」

「俺は採掘者ギルドのケンイチだ。よろしくニノン」

俺はニノンと名乗った少女に手を差し出す。

「よろしくお願いしますケンイチさん」

その手をニノンはとって、互いに握手をした。

「そちらの依頼の確認だけど、ハーレーイ山での月光草採取で間違

「いないか？」

「はい、そうです」

「よし。それじゃあ早速だけど出発するぞ。準備は出来ているか？」

「はい、大丈夫です」

「オッケー。それじゃあ出発だ」

「よろしくお願いします」

そうして、俺達はゼーの町を後にしてハーレーイ山を目指し、出発した。

道中、退屈しのぎにニノンと世間話をしながら歩いていた。

「なあニノン。さっき五番隊所属って言っていたけど、エイルが隊長をやっている隊か？」

「そうですよ。ケンイチさんの事はエイルさんから聞いていましたので、門ではすぐに見つけることが出来ました」

「へー。エイルは俺のことなんて言ってた？」

俺がそう聞くと、ニノンは少し言いづらそうに苦笑交じりに答えた。

「……その、『初対面から物怖じしない、歳の割に図々しそうな男の子』と言っていました」

「……ほう」

「わ、わたしが言ったんじゃないですよ！」

「わかってるよ。……でも、それを参考に俺を見つけたんだろ？」

「うっ、その、話しかけた時に、ちよっと参考に」

「なるほどなるほど」

「あうあう」

俺が無表情に頷くと二ノンは気まずそうに慌てた。
まあこう何回も世界を回っていると、誰に対しても丁寧に挨拶をするような謙虚さは無くなるってもんだ。
自分の図々しい態度は自覚はしている。

「まあ、怒ってないよ」

「そ、そうですね。よかったです」

俺がそう言つと、二ノンは安堵したように息を吐き出した。

「話を变えようか。戦士ギルドにはいくつぐらい隊があるんだ？」
ドードン

「はい。全部で5部隊で、だいたい1隊につき3〜4名が所属しています」

「それじゃあ5番隊が一番新しい部隊なのか？」

「そうですね。私がギルドに入つたことで、設立された部隊なので」

「それじゃあ二ノンはまだ新入りつてことか」

「そうですね。っていつても、もう半年経つんですけどね」

「俺なんかまだ一週間だから二ノンに比べたら、新入り中の新入りだな」

「ふふ。なんですかそれ」

二ノンは微笑む。

「ところで二ノンやエイルの他に五番隊には誰がいるんだ？」

「後はアポリさんという女性が一人いて、三人で五番隊です」

「ということは、五番隊は全員女性なんだな」

「はい。といっても、戦士ギルドドードン所属の女性はこの三人なんですけどね」

「……やっぱり男所帯なんだな」

言うなれば、むさい男の園に咲く輪の花といったところか。

「それはそうですよ。私たちのような女性が戦士ギルドに入ること自体珍しいですからね」

「ということは、ニノンは腕には自信があるんだな」

「はい」

「お、そこは謙虚にならないんだな」

「ふふ、それが売りの戦士ギルドですからね」

「はは、そりゃそっか。頼りにしてるよニノン」

「はい！任せて下さい！」

ニノンはドンと自分の胸を叩いて満面の笑みでそう答えた。

まあ見た目だけなら、ちよつと背伸びしている女の子にしか見えな
いけど、ここはニノンの腕を信じよう。

そっこう話して歩いていると、夕日が地平線に沈みかけていた。
そろそろ野営の準備を始めるか。

依頼開始と新たな出会い（後書き）

明けましておめでとう御座います。
謹んで新年のお慶びを申し上げます。

野宿

日もほとんど暮れ、今や空の隅にわずかな茜色の光が残るだけだ。

「ニノン。今日はこの辺で野宿しよう」

俺がそう言つと、ニノンは頷く。

「そうですね。薪は少し持って来ましたが一夜分は無いので、この辺で少し探しましょう」

「いや、その必要はないよ」

「え？ あ、ケンイチさんも薪を持っているんですね」

「いや、無いけど」

「??」

ニノンは不思議そうに首を傾げた。

「まあ、ちよつと見ててくれ」

「はあ……」

俺はニノンを待たせて、食料用の袋から一塊の燻製肉を取り出した。そして、燻製肉を空高く投げて叫んだ。

「取って来い！《ヨルビトノトモ》!!」

「アッオオooooooooooooon!!」

広がる景色以外何も無いところから、黒い影が空へと飛翔した。そして空中に投げられた燻製肉を掴みとって着地した。

華麗に地に4本の足をつけたものは、体表を黒い毛で覆い、眼光は赤く血の色に輝いて、口は長く牙は鋭い、そしてその体軀は人より一回り大きい。

なにより特徴的なのは、長く丸い尾の先が燎原の火のように燃え上がっていた。

召喚してすぐ思ったのは、「そういえばこの見た目だし、モンスターと間違われるんじゃないかね？」ということだ。

それを危惧してニノンの方を見ると、彼女は目を見開いてブルブル震えている。

あちゃー、やっちゃったか

「か、か、かか」

「あーニノン。こいつは……」

あー、もう完璧にこれはビビって――

「可愛い可愛い可愛い……!」

「え?」

そう叫んでニノンは《ヨルビトノトモ》に何の躊躇もなく、抱きついた。

「うわぁ、毛が柔らかい。モフモフしてるうう。きもちい」

「あ、あの……」

「ふはぁ、暖かいなぁ……ぐう」

「寝るな!」

「あう!」

俺は《ヨルビトノトモ》に抱きついたまま夢の世界へ旅立とうとし

たニノンを手ヨップで連れ戻した。

「いたた。すみませんでした。つい衝動に駆られて」

「ここまで予想が外れるとは思わなかったよ」

俺がそういうとニノンは、はっとした表情を言う。

「あ、そういえばなんで、急にこの子が出てきたんですか!？」

「……普通それが最初だよ」

「あとこの子。……デカツ!あれ?もしかしてモンスターですか？」

「そうそう、そういうリアクションが普通だよな。ちなみにモンスターじゃないよ」

「ああ!でも可愛い!」

「話を聞けよ!」

いい加減付き合ってられない。

ちなみにさっきからニノンに抱きつかれている《ヨルビトノトモ》は別段気にしていないように見える。

というより、こいつは外見は凶悪だが、実は物凄く人懐っこい性格なので、もしかしたら喜んでいるかも知れない。

取り敢えずニノンは置いておいて、用件を先に済ませよう。

「さっきの肉がご褒美だ。今晚の番を頼む」

「バウ」

俺がそういうと、《ヨルビトノトモ》は快く引き受けてくれた。それを見て、俺は寢床の準備を始めた。

「あの、この子は何なんですか？」

野宿の準備を終えてから、しばらくしてニノンが今更、「《ヨルビトノトモ》」のことに話しかけてきた。

「《ヨルビトノトモ》」

「へー、じゃあ『ヨルちゃん』ですね……………じゃなくて！どこから連れてきたんですか？ケンイチさんのペットなんですか？どうしてこんなに愛らしいんですか？」

「いっぺんに質問しないでくれ。ついでに最後の質問には答えないぞ」

どうやらニノンは大の動物好きらしい。

……………てかそんなんで、モンスターとか倒せるのか？

「じゃあ、どうやって連れてきたんですか？ 門を出たときは姿がたち見てませんし私」

「そりゃあ、呼び出したからな」

「いやですからどこから」

「別空間から」

「はい？」

「ああ、わかんないか。そうだな……………新しい『魔法』を使っ

俺がそういうと、ニノンは納得したように頷いた。

「あ、なるほど。それにしても珍しい魔法ですね。こんな魔法初めて見ました」

「『召喚』って魔法なんだ。まあ俺のオリジナルだけど」

「へー。こんなすごい魔法なら技術提供すれば、かなり儲かりそうですね」

「俺しか使えないから、売れない売れない」

俺は適当なことを言っておく。

「それにしても、ヨルちゃんは大人しくていい子ですね」
「そうだな」

そう言つてニノンは《ヨルビトノトモ》の頭を撫でる。

《ヨルビトノトモ》は、目を細めて気持ちよさそうにしている。
尻尾の火は闇夜を照らし暖かく俺たちを包み込んでいる。

「さ、明日は早朝に出発するからゆつくり休んでおけよ」

「あ、はい」

「それじゃ、おやすみ」

「おやすみなさい。ケンイチさん」

そうして俺は寝袋に入って目を閉じた。

「ああ、モフモフして気持ちいい」

「寄り添って寝るのはいいけど、気を付けろよニノン。寝返りとかするとそいつの尻尾で火傷するぞ」

「えー!? ……………でもこの気持ちよさから逃げられない——」

ぐう
「

好きにしてくれ。

さて今度こそ寝よう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3096z/>

世界を渡る召喚士

2012年1月7日01時52分発行